

江戸千家川上翠鶴

四季の茶花

二五種をいれる



◆著者紹介

川上翠鶴 かわかみ すいかく

本名翠（みどり）。江戸千家宗家十世家元川上閑雪氏夫人。

昭和十一年五月、岐阜市に生まれる。三十三年、岐阜女子短期大学を卒業し、三十三年に閑雪氏と結婚。以後、家元を助け、江戸千家茶道の普及に努める。

現在、財団法人江戸千家茶道会評議員、江戸千家不白会東京支部支部長の役職にある。

江戸千家

四季の茶花 二二五種をいれる

平成九年五月二十日 第一刷発行

著者 川上翠鶴

省
検
略
印

発行者 石川康彦

発行所 株式会社主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台二一九
郵便番号 100-0001

電話／東京（〇三）五二八〇―七五三七（編集）
東京（〇三）五二八〇―七五三〇（営業）

印刷 日本写真印刷株式会社

もし落丁、乱丁その他不良な品がありましたら、おとりかえ
します。お買い求めの書店か本社へお申しいでください。

江戸千家川上翠鶴

四季の茶花

二二五種をいれる

江苏工业学院图书馆
藏书章

主婦の友社

はじめに

今年初めての万作の花が到来しました。外では冷たい風音が戸をたたいているのに、お茶室の障子を通して届くやわらかい陽射しは、もう春のものです。

お稽古の日々、茶会の折りに、花をいとおしみ、楽しみながら茶花を入れつづけてまいりました。そんなある年、家元が「お社中の皆さまの関心が高い茶花の本を、出してみてはどうか」とおっしゃってくださいました。初めは、そんな大それたことはとてもとてもできないと尻込みいたしました。お稽古に見える皆さまとお話ししているうちに、好きな花のことでもあり、恥をかいても好きな茶花で本を出させていたたくのも、私の生きた足跡になるかもしれないと思うようになりました。

娘時代からずっと池坊のお花のお稽古をしておりましたが、結婚後も日々の仕事として花とつきあうようになるとは思っていませんでした。母宗鶴に教えを乞いつつ覚えていった家元の仕事の数々、辛いときや気分の沈んだときには、裏庭で育てている花に水をやりながら、語りかけていると心なごんで、さあ、もう一がんばりしましょうと、どれほど花に勇気づけられ、助けられたことでしょう。そんな花たちへの感謝の思いもこめて、この本でも一生懸命入れさせていただきました。

思い返しますと、撮影が始まってからずいぶん長い日々が過ぎ、引き受けてくださった主婦の友社さまにもたいへんご迷惑をおかけしてしまいました。一つには私のこの本への思い入れにもなりましょうが、できるだけ珍しい花をとり上げたかったことがあります。また現実問題として、家元の仕事が年を追って忙しくなり、なかなか時間がとれず、皆さまにお願いをしてお花を頂戴しながら、撮影の日とうまく時間が合わなかったこともたびたびでございました。そのため時間のとれた月の茶花ばかりが撮れ、忙しい月は何年たっても数が撮れないということにもなり、編集の方はさぞいらなさったことだろうと思います。皮肉なことに、忙しい時季ほど花の種類が豊富で、あれも撮りたい、これも撮りたいの思いだけはつづります。

間には右手の親指を車のドアにはさまれるという事故に見舞われ、二年ほど中断せざる

をえないということもありましたが、このたびやっと出版の運びとなり、感無量でございます。家元をはじめ、撮影をしてくださいました今は亡きカメラマンの萩原宣昭様、担当の斎藤悦子様には、ほんとうに心から御礼申し上げます。また、社中の皆さまにはお花をお寄せいただくというたいへんなご協力をいただきました。あらためてここに心からお礼を申し上げるさせていただきます。

長い年月を重ねましたが、花の種類は二百十五種にもなったと編集の方から伺いました。野の花、山の花のある地からはるか遠い大都会の真ん中で、これだけの花を入れさせていただけました幸せをありがたいことと感謝しております。ここに、この本をごらんになった方に、写真を通してではありますが、この幸せと、茶の湯の花、茶花の心に少しでもふれていただけたら、こんなうれしいことはございません。

また明日からの日々も、私は「あなた、さあ、元気な芽を早く出してね」「あなたね、もうそろそろお花を咲かせてちょうだい」と、花々に語りかけ、心を寄せながら過ごしていくことでございましょう。

平成九年二月吉日

■初春―晩春（一月～四月）

初釜を寿いで	10
寒牡丹	13
迎春	14
水仙一輪	15
衝羽根と曙椿	16
梅三様	18
春駒	20
此君	21
春近し	22
利休忌	24
紅花万作	26
辛夷	27
雛の日に	28
春のどか	30
母への想い	32
虫狩と椿	32
蕾ふくらみ	33
白雲木三様	34

■初夏―晩夏（五月～八月）

初夏の花三種	36
青磁の花入に	37
花屏風	38
侘びた小間の席で	40
気品高く大山蓮花	42
節句の日に	44
一房の藤	45
敦盛草	46
珍花天南星	47
二人静	48
梅雨明けを待つ	50
珍花の延齡草	51
野沢の月や	52
花五種	53
鉄線と仲間	54
甘茶	56
可憐な花で	57
彩り美しく	58

伊勢撫子	60
手付籠の花	60
掛け花に	61
夏も盛り	62
木槿 むくげ と芙蓉	64
蔓を生かして	66
コンポートに	68
筒咲きクレマチス	68
花は野にあるように	69
擬宝珠 ぎぼうし と山牛蒡	70
朝顔二様	71
蓮	72
盃蘭 うらばんえ 盆会	73
矢筈芒	74
初秋の花	75
夏本番	76
涼を求めて	77
時計草	78
高原の風	79
白浪 はくろう 漲天 ちやうてん	80

■仲秋―晩秋(九月～十月)	
夕顔	82
葛	82
秋の花とりどり	83
月見のころ	84
山路の花三種	86
秋の野	88
明歴々	89
古銅の花入に	90
名残りの秋	92
逝く秋二題	94
照葉二様	96
秋深し	98
■初冬―仲冬(十一月～十二月)	
孤峰忌	100
西王母二様	102
開炉のころ	103
早咲きの玉霞	104

照葉と寒菊	105
追善の茶会	106
冬枯れ	108
綿の実	109
はしばみ 榛 一葉	110
蠟梅	111
無事	112
師走の茶	113
年忘れ	114
木ささげ	114
歳暮の茶	115
小さな芽吹き	116
春を待つ	117
廻り花と寄せ花	118
茶花を入れる	126
茶花の知識	128
花入について	128
花入の種類	
用途による分類／材質による分類／真行草による分類	

真行草による花入の使い方	131
花入の手入れ	131
(囲み) 釣花入の使い方	128
(囲み) 花入の形と名称	130
茶花の飾り方	132
茶事や茶会の種類による飾り方	132
茶事の場合／茶会の場合／茶会で炭道具の飾りを略す場合	133
茶花と掛物との関係	133
横物の掛物の場合／一行物の場合	
薄板について	134
矢筈板／蛤端／丸香台	
禁花	135
茶花の入れ方	135
茶花 Q & A	137
月別茶花譜	141
茶花索引	147

表紙デザイン・レイアウト／オフィス 21
写真／萩原宣昭
イラスト／中島英敏、古屋恵子
編集協力／あくざわさきこ

初春 — 晚春

(二月～四月)

初釜を寿いで

お正月、新春を祝って家元では恒例の初釜が行われます。茶の湯を稽古する者にとって、は心楽しい行事の一つで、家元の点初め^{なぞ}の一服をいただき、晴れやかな中にも稽古への決意を新たにいたします。

点初めの濃茶は花月楼で、家元手ずから金銀の島台茶碗に心をこめてねり上げます。床にはめでたく「千年丹頂鶴」「萬年緑毛亀」の双幅がかけられ、鏡餅と玉飾り（家元独特のもので、こぶ串柿、根松海老、胴炭などが組まれたもの）が飾られます。

天井から大きくたっぷり下がった柳と紅白椿、注連縄に飾られた台子と、めでたさが花月楼にあふれます。

濃茶席

- 床 流祖不白筆双幅
- 花 「千年丹頂鶴」「萬年緑毛亀」
- 花 椿（白玉） 藪椿 柳
- 花入 青竹
- 香合 流祖不白好み 金獅子香合
- 釜 不白好み 寿釜 亀鑑付 浄元造
- 炉縁 溜塗 菊桐蒔絵 漆古斎造
- 風炉先 日の出
- 棚 竹台子 利斎造
- 水指 朱手桶
- 茶入 唐物大海 阿古陀^{あこだ}
- 茶器 鶴蒔絵平棗
- 茶碗 如心斎（表千家七代）作 島台茶碗
- 茶杓 不白作 銘「ゆずり葉」 共筒
- 杓立 不白好み 唐銅皆具の内 名越弥五郎造
- 建水 唐銅皆具の内





薄茶席

床 流祖不白筆 画賛

「初春や 人に冠 花に鳥」

花 椿(曙) 衡羽根

花入 青竹一重切

薄板 木地

香合 大樋 龍(辰)

釜 浄清造

炉縁 黒柿 青海波蒔絵

風炉先 当代好み 雪輪

棚 青漆爪紅糸巻棚

水指 古染付 松竹梅

茶器 独楽 喜三郎作

茶碗 流祖不白作 銘「寿老人」

茶杓 不白作 銘「鳳翼」 共筒

建水 高取

蓋置 印判「寿」



寒牡丹

花 寒牡丹
花入 古銅尊式
薄板 真塗矢筥板

わら囲いの中でようやく蕾をふくらませた寒牡丹を新春の床の花に。初夏の大輪のものにも増して凛とした気品をただよわせています。花入は古格を備えた尊式を使いました。





迎春

花 柳 千両

花入 古銅瓢箪花入

薄板 真塗矢筈板

掛物 流祖不白筆

日之出画賛

「昨夜金鳥飛入海

暁天依旧一輪紅」

家元の初釜には畳につくほどの大きな柳が使われます。柳を小ぶりに一結びして古銅の花入に入れ、千両をあしらいました。流祖の日の出画賛の軸をかけ、迎春の慶びをあらわしました。

水仙一輪

花 水仙

花入 寸松庵伝来

金紫銅六角龍耳

薄板 真塗矢筈板

嚴寒の中でけなげに咲く水仙は、清楚な中に気高さを秘めた花。寸松庵（佐久間将監真勝）伝来の古格の花入に、花は少なく一輪にし、春を待つ心をあらわしました。

